

ハンセン病元患者の
人権回復を求めて闘っ
た弐雄二さんが11日、
死去した。「療養所で
亡くなった仲間全員を
背中に負っている」と
の思いを原動力に車い
すで奔走し、全国の元
患者や支援者の先頭に
立って差別や偏見をな
くすための活動を続け
てきた。(27面参照)

7歳で発病し、東京
都東村山市の多摩全生
園に入所。発病して入
所した母や兄を相次い
で亡くし、19951年、
群馬県草津町の栗生薬
泉園に移った。

「肉親にみとられず
死んでいった療友たち

理論派、車いすの闘士

弐雄二さん死去 情感豊か 詩を愛す

は2万3千人余り。国
が行った数々の人権侵
害について謝罪を要求
する」。国の隔離政策
を違憲として99年に東
京地裁へ提訴。六法全
書を読みこなし、法廷
に響き渡る大きな声で
意見陳述する姿は支援
者の間で「闘士」と呼
ばれた。裁判のたびに
付き添った群馬県高崎
市の元教員、吉幸かお
るさん(79)は「すごい
迫力で、かつ理論的支
柱だった」と語る。

国との和解が実現し
た後も、かつて栗生薬
泉園にあった懲罰施設
「重監房」の復元を目
指して署名活動を展



2001年7月、東京地裁でハンセン病訴訟の和解が成立し、記者会見する弐雄二氏(右)＝東京・霞が関の司法記者クラブ

開。国が療養所の医師
や介護スタッフの人員
削減を打ち出すと、「国
はわれわれが死ぬのを
待っているのか。病み
捨てだ」と抵抗し続け
た。

直情型で激しい人柄
受け、詩文集の編集を

決めた。
昨年末に体調を崩
し、入退院を繰り返す
ように。当時から肺が
んと疑われていたが、
体への負担を考慮し検
査ができなかった。病
床で「約束したから詩
を書く」と笑い、今年
3月に詩文集を出版。
姜さんは「情が厚く、
社会や人とのつながり
をととても大切にしてい
た」と振り返った。

3月以降は寝たきり
で会話もできない状態
が続いたが、4月末、
念願だった重監房資料
館の開館式典には、移
動式ベッドで出席し
た。